

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 川瀬 さゆり

建築物を文化遺産として保存する際の修復にあっては、使われる部材は可能な限り当初と同一の材料を用いるべきであるという考え方が一般的に定着しているが、本論文は、著者が「材料保存思想」と呼ぶこの考え方の成り立ちを検証しようとするものである。建築物修復のひとつの大きなモデルとされる、19世紀フランスにおける大聖堂建築の修復の際に、新しい素材であった鉄が積極的に使われていたことに着目し、その実情と背景が、個々の修復事例に関わる徹底的な文献調査と現地調査によって明らかにされる。

本論は大きく二部からなり、第一部では小屋組への鉄骨使用の導入過程が検討される。第一章と第二章で、フランスにおける製鉄の歴史と、その建築一般への導入が概観された後、第三章では焼失したシャルトル大聖堂の木造小屋組の修復（1836-7）に鉄骨が用いられた経緯が分析され、さらに第四章ではその後に続く11件の修復事例が検討される。その結果、この時期、理論面で中世建築の修復を主導したとされるヴィオレール＝デュク（Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879）が材料の厳密な保存を求めていた一方で、多くの現場で鉄骨での小屋組再建が行われており、その背景に、材料より形式の保存を優先させる論理のもとに新素材の鉄の導入を図った現場の建築家達の自発的な取り組みがあったことが明らかになる。また、この修復の際に好んで設置されたクレットと呼ばれる鉄製の棟飾りをテーマとした第二部でも、それが、形態を材質より優先させる考え方と、新素材の積極的な導入を図る合理的志向とが結びついた所産であったことが論じられる。

本論文の最大の特長は、徹底した文献調査と現地調査によって、修復の計画段階の議論や施工にいたる過程を驚くほど詳細に描き出しているところにある。しかも単なる歴史的経過の再現にとどまらず、その際に現場の建築家たちを動かしていた論理や心性、感性にいたるまでが見事に浮き彫りにされており、ともするとヴィオレール＝デュク的な理論的言説に還元されがちな修復という活動の、現場の側の視点から捉えたアクチュアルな姿を提示することに成功している。そのことはまたヴィオレール＝デュクの活動自体をも位置づけ直すという成果にもつながっている。また、著者にはこの研究を、一歴史研究に終わらせることなく、建築物の保存や修復という、日本でも今重要性を増している活動のあり方を原点から考え直してゆくための糧にしたいという強い問題意識があり、こうした大きな視野のもとにこの成果が位置づけられていることも高く評価したい。

問題意識の射程が広いだけに、議論が十分尽くされていない箇所もあるが、もたらされた成果の大きさと比較すれば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定するものである。